

猿著聞集

壹

四九

卷一

島定岡先生著



猿者洞集

浪華書肆

抱玉堂藏

毛氏藏

前有古今若聞集後有犬若聞集益
謂似非君為犬邦假言自古然乎於革乎
謂龍為犬麁於木牛謂渡疏為大杓杓之
類職由之也子所選乎而似非君也故雖欲以
犬目而既上有以目遂以搖為名號稱著字
集君乎絕乎固固陋寡闊之搖似書似書
非畫而還似虫藉君也極等彼搖似人
似人非人而還似人類君也多其人之同

周公之服率鄙而辭俚君所由画工之摇
也雖善欺粗口智而不為而為拔蕭
信哉但物後日有苦惱婢君現事而七

政庚戌月

岳亭八思宣圖自叙

任齊友詒書



○附言

○此書さうぐるをとあつてそつまびぐへぬとだりこよ
さうくはくみへゆふむのせうごこぢとまうみう画くこと
いすうじかわのふまきぬのをすうてやよみびもえざう文章
をやまとべて雅言かづもるむ近ぬことをさうめぐれびのじの
人の玉王ふとぞくをうへたことどもちやうめうび人のやうみ
猿智惠の猿がさうに猿著聞人の作とまおひ玉ひそ
てかをとかんみのうがひをさくとやるへみうとあくびさた
るものとくらべや



壹之卷目錄

- 花成君三つ石かやどり玉ひの事
○唐店病者をのきあへ事
○梅男哥よもそ心をわざあへ事
○一鉢とらふ僧川の中をて汰とて院事
○國三道すすよひて狼子出あひ事
○折兼山小攏して天狗小あひ事
○数守山家ふ時鳥と待て事
○鷹良親子孝行の事
○唐店時鳥の初音と生産せし事

- 千僚ヶ哥やよつて賤の女返んうの事
○志店師のゆふ茶と哥とを贈り事
○市丸山家へ梅見み行く事
○梅男煙の日友み代りて哥よもよる事
○頼房盜賊ふ珊瑚珠をとく事
○万守松原もとあやめ犯男ふ出あひ事
○草浪山中みあやめ犯命を助かり事

二五卷目錄

- 赤岩庚申山の事
○足尾村の何げ子山ふ入て猿ふるい事

○杏取の浦大龜の事

○火の玉空中を飛一事

○大湊津が奇狹の事

○白川の何がふ家の幽靈の事

○千曲川出水の後鬼火の事

○春人地震お母をもひて奇詠一事

○生井村やて鯉數千をとら事

○愚直なる老婆が事

○飯室何がの家の三べー女が事

○須々木何じの毒多の返夏の事

○旦平朝寝とこのむ事

○正平朝寝とこのむ事

○田女を見うるゝひへ事

○素喜女をもひて川をこよひへ事

○丸雄葉合舟かて女を見へ事

○堀川小住女髪結男をまきせ事

三五卷目録

○春日あり御敲みて哥よみる事

○未成一首の哥を三ツ小詠分一事

四至卷目錄

- 石竜神靈驗ある事
○賑笠間の島ふ哥よ事
○万守長柄のやくろふ哥詠事
○寺安茶店ふ廿笠籠をとよむ事
○空窓道中毎日かけある事
○正平ゆる裸みて古郷ふかへし事
○其粋深夜松原ふあむる事
○百足鹿の声を聞事
○山大声みて五音よ事

- 裏行通ひ小町の繪あ哥よ事
○猿羽君ある翁羽の哥よむを悟り玉ひ事
○西東仁心の事
○松年入の難ととひ事
○歌志久蛙ととひ事
○唐店山路小狸ととひ事
○歌志久古狸を殺せ事
○集康狐ゆすじと事
○玉敏系夢みて玉とえ事
○真研子夢みて哥うゑ事
さる著りん

○吉住小びゑの事

○連樹種の声色をつかふ事

○泉あさると四民先生とりふ事

○飲居老若の文字講釈の事

○筆とつ娘坊主ふうじ事

○衆康心寛ふる事

○元右心優ふる事

○二巡とりふ僧の事

○菊泉養老山中ふ碍た立一事

五三卷目録

○三子九歳みて哥よし事

○曾帰山吹の哥よし事

○調古卿をもひて哥よし事

○小聖伊勢みて哥よし事

○吉技由良の湊子哥よし事

○合笛花を惜みて哥よし事

○和彌守が聖の哥小糸つ死男が怒り事

○衆康乞食小金をやうへ事

○数守好色の老女小哥よみて贈り事

○千畠吝惜の人小哥よみて贈り事

○吉住人の悪き夢見一と哥よみて祝一事

○西東家の前小夫の死るを哥よみて祝一事

○棄康太をりて身をあつめ一事

○斎藤何く家の田舎人の事

○男浪園子を喰ひて逃一事

○長人温泉小女のわらそひと見事

○千條奇よみて游女と客人が中をやもげ事

さる著りん

日五

○茂登輔游女小哥よみて贈り事

○春重哥よみて女の不義とかゝる事

○花成君哥よみて家士の放蕩を止させ玉ひ事

○百合丸中納言貞直卿小御哥と願ひ事

○目録終

穀著聞集一

○花成君三つやへやどう玉の事

西の国を考へてゐる花みつ君とさあからうとおひなうとおや有
えんきのへりへりへりへりやぢやぢやぢへりおひなうのこころべ風
じとせんべいのゆのひだりもねぢるもさがるのひだりわくわく
わくわくじぶんじぶんじぶんじぶんじぶんじぶんじぶんじぶん
ひじうのたかひひくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

ちをもつねてもひのまめよ

うひてはあひへどもひそめのひそめのかへせよどべそぐまくす
てやまかづくつとあてもだらうれしへ雪ひきくわづくやがて君のあん

史より云々が君の手をもろづぐゝとの如ひ

त्रिवृत्तम् अपि द्वयान्वितम्

やうやか

○唐麿病者といひむる事

三ちのく三やだ。野のやうのとどく。錦織かく店。そのとくわくあや
依伯のちやくといぐる人医いをまゐぢんと。文明四年めいぶんのうそく。お行ゆきてあるべ。紀
八年八年あかくぬそく。明の成化八年めいこうのうそく。あられもとく。こそばく。せきけ。ゆゑふ

うへとくのめぐらむかみじよもやくわくへふるかぞくかく店やつし
まくらの因のてむひとかへてはよかみんあつまつス仁のそろふく
やある人をうそて心をのぞかうとすをやうもやのびくわざあつる
おきじつめくらふりへとまげて見あた人あつてものなやキひかえ
くらやかのくどうのあらへもやえど今へなりのくわくらき
さんとちくらばくらむかのれどそのえのもゑみかく店がくとひき
てうげをこびてくらひくらむかくらとくやびて行てくらふきく
てうけくさくらむかくらむかくらをかく店日ごくく度
うといてやまひのやうを見そうをつけてくらとくとくとくのなせられ
が十日をかくすやうせまるやうすみう三十日をかくすやうとく

きの著のり

○二

まくらふくらむかくらむかくらむかくらむかくらの妻もふあびくらとあゆひくらの
あゑ人やまひおこひくらのちくらのくらひくらひくらひくら
くわびくわびかく店がくとくとくせざほよみくびのあくびあく
くわびくわびかくももくわゆひくらひくらひくらひくら
くわびくわびくらむかくらむかくらむかくらむかくらむかくら
むかくらむかくらひ居てちかくみてかくらむかくらむかくらむ
むかくらむかくらむかくらむかくらむかくらむかくらむかくら
むかくらむかくらむかくらむかくらむかくらむかくらむかくら
むかくらむかくらむかくらむかくらむかくらむかくらむかくら
むかくらむかくらむかくらむかくらむかくらむかくらむかくら

さう著ひ

三

せうづやのやすひをまくとくへかへちかひつればかへやがゆみのま
よそもやぞこくらをまきそがへはあ死へがう行て又がい
のちをもたぐわざうととのくすの人のまく

○梅男哥もそぞろをあつこむる事

阿波のくふとくへ冬の渠裏ヘうとうと頬部セうめ男ヘヒト見セるを
きそくくわいヘみヘ請ヘくヘのヘおぐヘめやうるヘうつヘさるをひくヘの
行ヘあヘかヘかヘみヘ友ヘむヘせヘまヘらヘひヘやヘれヘ心ヘをヘあヘくヘやヘくヘけヘまヘ
このヘいヘくヘ下ヘゆヘやヘあヘみヘひヘづヘのヘこヘもヘひヘくヘあヘくヘのヘひヘくヘきヘ
むヘせヘごヘ波ヘだヘてヘかヘくヘてヘ志ヘかヘくヘこヘやヘじヘあヘくヘくヘくヘ
みヘせヘげヘきヘくヘれヘだヘみヘあヘくヘかヘひヘくヘ、ヘうヘくヘくヘとヘ見セすヘくヘん

ふとこれうがひひやうしてあやまちであらむかただかるてゐ
うはとくら孔子のをくをこそ本のくもとがひやうてあらと紀
あざくわがう行く日びうのあやまちをあらじのやうあるだけう
一せうせうせう

わちけ死心のわゝやゝとる今やまへのそゝがくへ
とまきそもあらかわむらひどもうせうめくあう行で今へわや
くのひぐれをつゞいて書道をよませ筆あじのとつみどきへあうとまくこ
ざとくふへゆ入へかうことあうとだのうづル

一鉢とのよ僧川の中モ法をとる事
のよふろ坂小長国山の院主一鉢とのよ

か
斐のふくろ坂の長国山の院主一鉢と見る僧ひよりふきよみ

詩つう山水のゆゑにあやしくかへるをきくせむとてひこあやかう見

うちへくまわるかのりで何どぞと云ふ。何じの寺僧やまひか
かうかのとさうのあらもとをいのち今をもあらばうどねがく
師かひとびとえまゐせつてたゞとまうさくふやんごく
そーかれてもんむくすまうなつてふぞかくとづびとく院主ゆみ
ておどろむちうひあれをさてがへてたゞ行べとて立ぐ侍僧ら
あくせんとせんばあつたひとびとびとざくかへてこびくかへ
をあくじるかとくとひとくかへてかをらがとくのとくよ
りふやまやかうかうまやか僧とくかねつぬとまう
あつてめきぬまびのつる轎^子にもうごうどくふのとくとくち
それお笛吹川のを、^{きえいが}かうきのいとがどおこひしてこつての

さる唄^{さん}

○五

上うる木をきてひだりけくつ外ありびべたとびをみて身をもとまう
さが川をあづくらとくあやみをかうまくことくらうこじくさを
んとうひくうをまなみうらぎとせふくう僧^{くわ}のゆうちひく紀
て四方をまろか川のけをひりとおかへろく水のわとあくらふかせ
まく月とまごとくかたとびとれかをとくかひふのをものぞめう
僧^{くわ}のあうごぶるさゑをかううしゆど時^{とき}^{きん}。とかくさるやどふ水
かみくみゆみがたうのこほりつぱがむすまかせひとくのきがゆふ
うちのつづみこづむかうの人まかうけあつたゆをうともどう
きこ何人あうもとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
さとく師^しやあかへつうううううあへかうまぢあやかぬううう

かわをもどよとへやがてのかつてこしとせんとと僧せひへてさる
せそそすひかることあつてかうさゑのまじでたふくうさかれのちえ
かうやうのみがせんとあつともおがえどかむかうの小流あつとも
ゑふだかうのまうあうんがまゆへでせらが舟をこよやどゑど
あくまどこそかめぐらめといひなれぞこのひとぐ僧うもつま
ひかひてかまくつまくと舟をきてかつねのつみちうどひかう
を僧りなきぐの徑くととをひだるびてかとくとくやうやくあくう
きかみく行こう山のをちうだ月をみうかて

たとへうかくいざへ水ふきむとあるつるやーの山のその月
とみくらふみぞ僧をうじさせてこくくまくものむとかつまれ

さる著りん一

○六

かわをもどよとへやがてのかつてこしとせんとと僧せひへてさる
そもげのたくれ僧はよあくままでのつみちとれてござりなるこ
かめぐらまくあづかづく

○國三道ふまくもひて狼か出あひー事

かみつけのくふ沼田のまとふ國三うじらかの氏を猪熊とよぶ
きるいとだるをとむのう画をとめうたう十三のとーのちるやくひる
うぞおみづれくすうる伊香保の里うう画師の會たるかみよやー
をみてこれおやうまくおひひ友二人をかうひざまひゆをぬみちうて
友ごち用のあつとてあとふまうれをまちつけでゆうまーとまう
ぐの祀をかまううちうけたがうくからこひゆくされど友ごぢれ

こざかのひさと日がけなひよろこてゆくとぞうしゆふ本を
せきと聞みて日がけなまづくわくへ小とち十二里の山をや
かで中をもあ家ひるて木をひきげつむとけぬばれに
あわせのとくらわもあうぎるかくへそとむようでさゑひあう
きよかのとくらわもあうぎるかくへそとむようでさゑひあう
もややかにかくへかくへかくへとあぐだぐ行されがくまむら
あがつてかくへかくへとあぐだぐ行されがくまむら
あーみぐのがくべたこちもともおがえどくへかくへとあ
ひくらふあてくわとまきのふ行かくふそびやをくら松ひとのとあ
りきれだくらうじてのがくきう狼ひ木のとをめぐらしてひとこくふ

さく著のん

七

不也。よいかもあらゆくかひへとむかへよつて國ごうごどもあ
りて神佛のかうごのまづくあろをなまくわがえどとひるん春の
よきかへせざもよるちゆひもてちゆひつゝびへとまくやうく
ひびちうそかうとねぐらをなうとゆけぞりつむのもたさう
ぬくかみつもとめてのだつてうちかみづきて行がやをく禁よりあ
りよりうみづをめとめてモトのまづかかる中みも

おやかとおもゆつてことのうれでもひと夜のうれのをくふとも
おやかとくらまざびつかうきうとくくみのうべのミドからだ

○折^{カツ}萬^{カウ}山^{サン}小^{カク}猿^{ヤマ}一^{イチ}天^{テン}狗^{ギョウ}小^{カク}あ^{アヒ}一^{イチ}事^{モノ}

えどのふ闘城の水井をうゑりと見るをくわゆう備たる

さく著のん

八

うちうりてくとおかやをぞくあわせたる。とぞかうあつてひこうの
山がの僧そういぞ見てみんぢがともがうみざうかこの山をもつて昔
きうの旅りょ戯ぎをさゑづけやもふこそからかうため又せうらあれ
とく山をくづきべーさみだらうゑてある三さんがへりこれうべてや
けとてびざーるのをしげばなれおうせつらかひのひろつとを
ひづくちのまさきおそせんぐくわとりうそ入いりまし青せいみあつめても
きく今いまがとうきどくしててもことれてはちやへざとくめざう
ぬそもううううのふうあつえんとあやへかう死

数守山家ふ時鳥
（きどりさんく　ハトミタマ）

卷之三

奇子

むとをこのまゝあるまつのもとあおびたとぞせんばをもむれ
ざつなまび片山里のやうりのがへてひ行てのどうかともゆきをもむれ
は」小三ち三千五六里をかうあまほおびくわあくびへゆのびひる
かくぬふ行かくはまくのひよびくわまびくわのびくび人の
よむべをとくつゆぢかるむがのひよびくびのあびのを
みくすご数かくは太やうかくひさくまどあさうじひだひく
ひぢうぢうけくびくまえつま今やまくとひくとくまどひと
こゑおおじかおじがむぞれがよへまく身のうむとやまくわく
ふくふくのまくとくかくわとうちかうがく

やとくおひひとつぶをうるとまなづきびて

さる著のん

とひてあらざへかうがく

わとくぞりたとひとづきあざまるとおおちこひく

とひへびうおみでてのひきをどりへあしはまの三ちみじえ
あらざるあぐつをみだつて守りあやへたてひうひつを
狂氣あらぎあことあつめと外のくわうしてのりほひ候まつまつまつのむつ
るごとくらへのくわくあかうる數かずかうがう記きとひてゆを
とくれむのあとうやふあくつにぬあいじじそとロのやさりあか
きつが何なにふうこあやへまうまう數かず守まつけことを候まつて下しものくわうみじ

トナカミヒキナガウチトモジアラカツコジ。アラシキナタヘオドウゼヤナジ

ひきてこそけあがじつるゆきめかのぐひかうてびひあじじてや
びてじりて梓木お行くづれぞ人ふひそむよひうひきつ

○鶴良親ふ孝行の事

ひこちのくふ水戸本町の遠友鶴良のむらをきの子あてをさ
み名を字の吉とひう心とふあめやうあて孝心ふかく何があれ
親のことかうがふとあきやかふかへつまかくみこくちゆもス
うながのあめでうつぐとおのひう鶴良一まきく心をのちひ
りふつうふひうげをきくあそれこそものへとれが人もスカラコがひ
つらとあめびうてつべきあれ良十四のと母おのたやすひか
かれてすくらをあどう死にびてんきとこのことうをつひ

さく著のん

〇十

えそきうちまわくせとくやお行てもをうくかくとてやまひのやうを
うかじひつやうくかのくみあれをひうへひめもきくこくうか
づ見うるかよきがうかのくみださとうつ家のうちの人ふきうあきうえ
ど古口田明神の三やうふあうのがつて日ごぶいのう細谷村ある
七面のやうくみださうみてねうひをこめくと一がうふもみづから
をくうてびうてじうてこくをこくめびづけうをもこぐみふかの
じとあめうせつせをうへてこゑーひもくぐだかりふかづれぞれ
どよもひきがみとねあやあつさん母がうひみく目をあざぞうみる
國の人とくみうなさうねづふるをあうつめるをかうまえふる
り行うるのちがめもあつうとがふうとがふれまでみうみーみうびてま

きことえぬがかつてゐたからにサ日をかづひくもであつ
たとへはこのうのうちもまことにうへゆめこむがかつ
てここにやめかへてすむひてやがてやされて青銅セイブ
くられおみやげのひづのつがつともまつめびらかれて
かくちつせる種良アキラとくかくもつてもまことにまちこなひ
老シテるをかづひづのまづくをこむけしてつぶつぶ一とじと
るえくされ十四つと一の春ハナミタツるふ

ふうかうか十曲のすゝの春を笑ひて
こまちゆのあじまもあひ死ゆてこそさうがるやとあひぐれむ
うみみくもさうだ二日才やひてへとみゆでくはんとくわあせれふめ
びひむうみゆつて人みゆりひだ

さる著り

○唐麿時鳥のそらゆを土産ふさる事。

月日
おもかげ
仙臺の錦織から店の見える夜とまづのふ行でかゝる
と見て山里をとてひくさう夏のとてぐる百疊がやとくだきのまつ
ねをきく

十一

ハバニキヌカハナガクノミムシスル親モキニシテモヤト
モヒナヒシムシタニスル人ホカハシムシタニスルのキヘリシムシタニスル
ヤトマガシタニスルのキヘリシムシタニスル不ジカヘシチスルハベビタニスル
モハベビタニスルのキヘリシムシタニスルハビタニスルヒスルキシトモウシカヤヒシ
ハヒスルハヒシトカハシタニスルヒスルカハシタニスルヒシトカハシタニスル
カハシタニスルヒスルカハシタニスルヒスルカハシタニスルヒスルカハシタニスル

まへこゝへたそちさるみかへどのそれうをうかうそくわ
やそぞださのふたとよびへくちゆめうともふあせうをへきと
ひゑがから店とうあへぞ

りべとおみへへことくもくへくも

とうみの白むろやへるしき

○千僚ちきょうの哥うわらうて賤しづかの女返めんか哥わの事

えど両国りょうごく小をこる石川千僚いはらひくで春のををめうべひとの
ちゆをちゆをぞきよよと友ともぢら四五人四五人ひづくくあゆふのの
あやせ川あやせがわをさうのびび花又川はなまたがわあつままふあがつつそそかかこそを
ぐあれ死死があやのまづまづが家か梅うめのををみののとおももろ

ま著まくりん

○十二

くさむのぞぞるあるひみちのびびおあげあげあひひるるむらのうちうち
うびうひひのこゑのうちうちのびびるをキキくく心心ものものばけばけくくてあら
ぬざれぬざれととめだりひひかかててのこゑこゑひひつつああううたたかかくくぬぬ
ああおおどどれれ死死ててそそくくののああびびののををううかかくくぞぞくくうう
ききるるををここるるああももををじじととああひひややうう行行そそののちちののややどどぶぶと
ああおおれれああびびややののううちちああひひひとひとののせせののじじままくくううななののううちちよ
りりそそととののどどををるるをを千ち僚きょう

山里さんりへううびびひひままくくもも下下へへややこののううびびへへ死死
ええみみくくをを女めままくくううああへへぞ

山里さんりへううびびひひままくくもも下下へへややこののううびびへへ死死

まことかへし石をひりぐるや打とあるをてやどうだきう千僚へ
あがくわらじておのひやうへこのゆくかそくえことをやうあいざう
てつるはしゆのをとやうへくかべととくで火ひとうかくんとりひ
ておりうゑたひどくべとてひくまくさとくのこゝのに女をつぐ
るやうのやどみをぢむかづくふくしてうやへがゞきのあともや
かみへく日もげづくざれどさうのもくのぞくあざく人
びとおとくとくびむじうをあそれがゞきのあくびふくらとく
あたうかひとやくさんちのひくとぞき

○志店師（まちねし）のわく茶（あや）とくことをもくる事

えど石原（いはら）ふたとくらの熊田志磨（くまだしま）つねをくことのさ
さる著（のり）一

○十三

ておやくひくとーごろ志店（しまん）がよろぐまるびの師（し）ふく保何（ほじ)

とく人あうけ師（このく）ひつせふ茶（ぢゃ）をこのみくとあるとー春（はる）のもドめ小
志店師（まちねし）のわく茶（あや）とく茶（ぢゃ）をおくと

あひてきをかどぐる春（はる）小うぐひとのまくのまくをまゆくせ
ごときとくたてかく金（かな）が志店（しまん）があーろをこすもひひて又ひだ茶（ぢゃ）
まく人かわくせくそくふくとくそくとく

あひてきをかどぐる春（はる）小うぐひとのまくのまくをまゆくせ
まくとくたてかく金（かな）が志店（しまん）があーろをこすもひひて又ひだ茶（ぢゃ）
まく人かわくせくそくふくとくそくとく

あけでまきめてぞ見春かうべひきのひに茶をやむせ
じたる。よのみてあくとみだが師もみやあわへうかつて又とくを
もやくうもぶりとあくとみだりへるゆづゆさとのそとを
てゆのとくらをそのさまをいせざとへやつて
あけでまきめぞ見春かうべひきのさくらをまゆら
せどもととよみをかへとみだが志店まちへかうへ見ことあい
りひてびいだ茶ひにをあくはうづれ他家ゆえするだかのゆ
たぐとすゞと

あけでまきめぞ見春かうべひきのひに茶のうへま
まゆらと。どうむてつるかく師も又松がとーとりゆをあくとそ
めあくと

まきめ

○十四

あけでまきめぞ見春かうべひきのひとをあくばにと
まゆらと。よみてかへしをみだが志店今へ日もく正され何を
あくと

かぎくのかてうゑ春かうべひきのひとをあくばにと
まるとよみてくんざくのひとみだが師もこくひてやくみ

○市丸山家へ梅見ふゆく事

三のくふ今尾の里か渡邊市丸あくとぞ山里の梅おわ紀
とこうあくの人のあくとみだが梅まづ花見ふくん花さうぶむく
まゆらとびとくとみみかうひてこられう次のとくむうだもとて
きんとむろうのやうのひとよ行うごの中ふうべひ菜とりふ

のあかへてひまかに人やかにしもせりやうせんやあくとふを
どもあくざつひのめのふくたうべあくざつじゆかうらが何とうりひ
きーつむとくた何ともものうみよだんとくさが何^{あか}
うれす一今のかどく梅もさなづかおーそをあくわゆくわがひ
て人をももあくわゆかうせうことをこむかうとぞもが
やうをのじてこだまそくやうのひまでひぐるいとがくと
べとがくらまく葉のひじあたぐこのうぢがくじやうぬゆかつの
くわくわせうそこをこむかうとぞがくび人をもせんむとひ
あくわーとこくふつわかくさくわくうがの中をくわくびとひ
ひとひくあくわくとくとくをくわくび

著者一

○十五

梅さくべづくとりひーど里のつるふきーうのをのうぐひと
とぞくわくとくわくとくわく梅のうぢがくじやうぬゆかうと
みのうべドあくわくの日市をもくわくとくべ梅^{ひらます}はまたかくふぞあく
○梅男雪の日友ふかそうて哥^きむ事

阿波のくふとく島の額部梅男ある冬^{あき}の日の雪^{ゆき}の下^くあや
きとだ友がくわくとくめぐらひくふあるーとくの何^ながく
わくとくにくわくこのうぢがくじやうぬゆうへくわくのうぢがく
のうぢがくじやうぬゆうへくわくのうぢがくじやうぬゆうへくわく
ひくふのうぢがくじやうぬゆうへくわくのうぢがくじやうぬゆうへくわく
もかくうさくみ何ゆうあんとうつひのあくとくとくをくわく黄^きの粉

さう著りん

うめき
玉藻の死このと死梅男あるドかまうそ

うじるをこうあくみうづひのあけそんや一元雪のうち
ひく。こまかの墨えりをじてあくらかへむ

○頼房盜賊小珊瑚樹をとらひ一事

づぐみのくふ壇ふだんの小西こにしすゝ房こねある時友ともひらこうひきのひさ
旅たびす行ゆく冬ふゆの日のりとミドみどうたかのそぐべを用もちる事ことであ
くやかくもちゆがくかのもそくやぢれよあつと夜よまごあけやさ
かふやじよとこちのとそくのとく風かぜまみたをものともせ
で小三こさんち五六里ごろをまかまかれども時ときやくづくらひてふきんふきんいすま
夜よあけをかくりへとくろふ松まつのかくふ大おほいゆゑゆゑたのこ六むつ七しち人ひと

火を止むものが一つあるとあつてあづくらねまゝ居つたる頬
房も友とももとおもじろたる人をそぞろひも見るどふこそ
あづくらぐせんとおもひきれどもかへらばたてすかへらもあづ
どと頬のせひとものなかつてどもおひりゞく友とももかうと
りひくとへきとへがうてともとさうそでうをあげ。こゝかゑ
ゆつあげてのどくおもめことくはくべじへうで火をかくんと云
てそれからがくさるおもとくあつてあづくらのみどかへりつ
大きのくらめくらめくらめくらめくらめくらめくらめくら
をえておもとくらめくらめくらめくらめくらめくらめくら
五かどざとおもひこちあがつてつらめくらめくらめくらめくら

きとくらめくらめくらめくらめくらめくらめくらめくらめ
きて行く道のわざ二十ばかりもまづくんとおもふやどふ二人
ともひくまつともひくまつともひくまつともひくまつともひ
あともり人のくびをやつのたとひくまつともひくまつとも
みこのよかくつこととひくまつともひくまつともひくまつとも
あづくら友とももどろださぬあへとおもふなどおもひくまつ
をこへかさばてかづく一袋のさんごのをじめなとくめてどもが
やくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
うだくらへかづひあづか。おもとくのそぶおもふてあるを
おもひづみておもとくうけんとあやーそもそもすの術をう

まほびとふくととでろもとろへもわひくとすくかうべ
ゑとせうがうのさんごのをじめへ燐もくわのあくみせののうり
そをうとて火のうへんとおうちすりやとうだましれを火のうり
つるはすとけむをうせらるをやからわのとくへんぶきで
あくひとくのうへあくろたかのふわのひへ今へあそる
くろうえをかへとぞ人のりひあくへ

○万守松原ゆであやへた男かあひ一事

えど石町ふきとあつ太島万守旅ふゆう家よととのこと
もぐく。とくかくせつゑへとせつとそとをあくせつゑをだきひそ
ぶべへとて夜とくあてかへくらう三ちゆすとおきのあうのぐくを

わくとくわへくともすやうきくね。とぞかつあつていとまうぐへた松原
あくとくうわいづまのとくみうぞばくわのあくみんとおひつらこう
あやへげる大男二人たとけみちのあとひみう出^{いだ}きそ行^{ゆく}ひとくへ
まなぶるひとくへあとひとくへ万守を中^{なか}とくへてやくいづま
ゆ四さくむかくととあくみとおひふをあつるるみうだくらるひとにづ
さくへるさぬもとくへげるうつりひとだかととあくめモド^{モド}うけを
どめにれのこくわにかくらむあく太刀うひ^{うひ}さとめとくへえくらうを
らかくうがわどくもそうば死^うかじとくろのうわふもかひつ身のうち
のわくうとくさうのかひみくへてかくへととくへめをとくへてさうだと
あくへをくもかくす今やまくかくらんそらみてやかくらんとくろ

さく著の

とくちどさみつゝとくちもりてどかへうるとくえん

十九

○草浪山中かであやうたひのちへとから事
いづみのくふ壠の金井草浪つみか旗小行くことこのみまうある時
こめのくわ行こう何ほじきん道をくづへとさうぐへて山のみ
らかぞりつゝる。とかくしてこそくべどひむけた岩のそぎゑふひと木の
松のひとびやをくるがある。そもあがへ立とくゆり四方と見え
るところ小松のこだますみのくおとと何あつあらんとめをとめ
そくゑ立が大ひきう猿の枝のすかへつむゆくみぞあへるひと
きくがかりとくはのとひこうごうをうかへくちまち疾炮の
くゑこだますひて草ゑみうへてるじろの松のさうぞなとぞ

うちをうちまへゆぢらうどの「^{アシタカ}」とあつけめとみだらもそ
ろへみて立のかんともへどもひつりのかり人あへだぐ
まへり来て草るのをかゝてもどり死ものぬけにばらの猿サルをまも
うちをあまくがめひつりかの人のおもへつらふゆめがあづのあ
らざれをさかのことくみやことひくらふゆめーせのあじ」といえ
さうはと見たるへびうへくみばさくさんえどるすに狩ラバびとへ
そぞろかのあーことをうちつぶつへかへてとと草浪トガめく
略のやどととひくねどりとおめやうふきへきつ草浪トガめく
をのぞべつこかくとぞくとぞくがむ

狩ラバ人のねらひへれて猿サルふくわこのひとひとひつらう那

ととひとひとを狩入ラバドウやうちこひてこうれくさくの草るゑくを
あへ狹ヒヤ廻ハシマかへうろくへつまをくへとゆゑあくろゆゑびへと
がひかのくばやまをくへるもあへどあへとくももへりやへとくも
又じろふのあとへと入を表。何からかへせばかのかくへる
と草浪トガたへくまへとひくねどりとひくねどりにげなせかり人ヒト声あげて
ひくねどりを耳アシのかけだそへりけをばくやくやくへん里
あるかのうどり草浪トガうふへくある家ツツかへくのうへくとけ
あへとさけびくねどりあへる人ヒトまみりで表。かへ入ヒトへく
ひくねどり草浪トガ身フミまへてあらまへをれかへり人ヒトへく
つをあへださむかふみりてる哥兄を紙シテてくみりべへら

さうへとよみかげおもかげひつじがたてこもかくべらひ
まわせふれとひきびだりててゆだかうもあうびに
さかはせらむそろへのまのひまわくまゆひとく行
みひきまへよよとをだめて心おちゆでやうそくせんとくぐ
うこうだてこくせん入くをかへがつて三ひうちよひてやま
ざうだとある人ののびる

猿著聞集一終